琉球大学学術リポジトリ

漢字圏の学生にとっての漢字語彙習得

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2012-04-19 キーワード (Ja): 漢字圏, 漢字語彙, 語彙習得, 母語の干渉 キーワード (En): Sinosphere, KANJI compounds, vocabulary acquisition, interference 作成者: 石原, 嘉人, Ishihara, Yoshihito メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24136

研究論文（査読なし）
留学生教育 第9号，2012
（琉球大学留学生センター紀要）

漢字圏の学生にとっての漢字語彙習得

石 原 嘉 人

要 旨

本稿では，石原(1990)の内容に新たな知見を加え，漢字圏からの留学生に照準を合わせた漢字語彙教育の可能性について論じる。彼らにとって日本語の漢字語彙を母語と対照させつつ学ぶことは，東アジア各国の地政学的な位置づけや交流の歴史の認識，近代化の意義などについて再考を促すきっかけになり，学習意欲を高める上で十分な意義が得られる。その一方で，彼らの母語における漢字語彙を有効に活用するためには，母語の干渉による誤用のパターンを認識するだけでなく，それぞれの言語における漢字語彙の分類を明確な自覚を持って再認識する必要がある。

【キーワード】：漢字圏，漢字語彙，語彙習得，母語の干渉

0. はじめに

日本語学習者に漢字及び漢字語彙の習得を指導するにあたっては，いわゆる「漢字圏」の母語話者であるかどうかを考慮して，教材なり指導法なりを決めることが一般的である1)。母語の知識を有効に生かすことができれば「非漢字圏」の学生と比べて効率的に習得できることは言うまでもないが，その反面，母語の干渉によって字形，音声，意味，文法などさまざまな面で誤用が生じやすいという問題点も明らかになっている。

字形については，いわゆる繁体字及び簡体字と日本の漢字の対応関係の中で，とくに間違えやすい例を示し，注意を促す必要がある。近年ではレポートの提出などの学習場面のみならず個人的な連絡においても手書きの機会が減ったため，上級者であっても正しい字形を覚えていないケースが散見される。「毎(毎)」「來(来)」「吳(呉)」など使用頻度が高く間違いが目立ちやすいものばかりでなく，日本の漢字との違いが小さい「着(着)」「骨(骨)」「写(写)」なども注意が必要である。字体の認識については，1716年に上梓された康熙字典の成立から各国の近代化に伴う「国語」の制定，1960年代の簡体字の成立に至るまで歴史的な概略を確認することで，理解が促進されるものと思われる2)。

音声については，石原(1990)で指摘したとおり，中国語・韓国語の韻尾の「-n」「-ng」

と日本語の「撥音」「長音」の対応関係を指摘し，注意することが肝要である。また，ベトナム語においても同様の対応関係が見られる。更に，韓国語とベトナム語の漢字の韻尾には，ともに入声音「-p」「-t」「-k」の残存が見られ，広東語・福建語など中国南部方言の音韻との相関関係が窺える3)。筆者の経験では，「合」「十」「納」など入声音「-p」を持つ漢字と日本語の長音の関連を紹介すれば，「合格（ごうかく）／合宿（がっしゅく）」「十分（じゅうぶん／じっぷん）」「納税（のうぜい）／納得（なっとく）」のような読み分けについての理解が促進されることは間違いない。しかしながら，残念なことに中級以上のクラスにおいても，こういった対応関係を把握していない漢字圏の学生が少なくないのが現状である。筆者は講読クラスなどで漢字の読み方で混乱が見られたときなど機会を見つけて指導しているが，漢字クラスで体系的に指導し，練習させることができれば，正しい発音とリズムを習得させることがより容易になると考えている。

字体と音声の詳しい指導法については別の機会に論ずることにして，小論では漢字語彙の意味と文法に関わる諸問題について実例を挙げつつ整理することにする。

1. 先行研究

漢字語彙の日中・日韓同形語については，例えば石・王(1983)や柴(1986)など，漢字圏の留学生が増大する以前から多くの研究が行われている。前者では日本語でも中国語でも動詞として使用される漢字語彙を取り上げて，自動詞，他動詞，使役，受身などで誤用が生じやすいことを指摘している。具体的には，日本語の「発展」は自動詞であるが，中国語の《发展》は他動詞として使用されるため，《发展经济》を直訳した「*経済を発展する」のような誤用がしばしば見られる…というような，非常に有用で実用的な指摘である4)。後者では韓国語の漢字語彙について，《하다（hada）》《되다（doeda）》が後続する形の動詞が非常に多く，それらの受身に対応するものとして《받다（badda）》と《당한다（danghada）》が，使役に対応するものとして《시킨다（sikhida）》があると述べ，これらが日本語の「○○する」に対応するか，「○○される」あるいは「○○させる」に対応するかという点で誤用が生じやすいという指摘がなされている。

漢字圏からの留学生数の増大を受け，近年，金(2005)，若生(2008)，杉村ほか(2009)，吉田(2011)など新たな研究成果が発表されており，石・王(1983)や柴(1986)の研究を更に発展させている。いずれも非常に重要で実用的な研究成果であり，日本

語教育の現場に活用されるべき内容なのであるが，日中あるいは日韓の二つの言語に限定された対照研究であるため，中国語話者と韓国語話者が混在する教室で指導するためには，これらの成果を総合的に分析して作成された教材が必要となる。また，松田ほか(2008)のように，ベトナム語の漢字語彙(いわゆる漢越語)を調査対象とした研究も，数は少ないが発表されている5)。しかしながら，これらの研究成果を踏まえて具体的な方策を提示した漢字指導用教材は，いまだ開発されていないのが実情である6)。以下，過去の研究成果を取り入れた実用的な漢字指導教材を開発するための枠組みについて考察したい。

2. 文明語としての漢字語彙

漢字圏からの留学生が日本語の漢字語彙を習得するに当たっては，二千年以上にわたって東アジアの秩序を支えてきた「旧文明」と，欧米から新しく導入された「近代文明」の違いについて意識的に区別することが重要である。なぜなら，「社会」「権利」「個人」など，近代文明に関わる漢字語彙は，漢字圏において広く共有されるのみならず意味的な誤差が極めて少ないという特徴を有するからである。これらは，漢字圏の学生であれば習得がきわめて容易な漢字の一群として提示することができる。

近代文明に関わる漢字語彙の共通性が高い理由として，それぞれの地域の知識人が近代国家を成立させるために必要な近代概念である「society」「right」「individual」などを漢字に翻訳し，「社会」「権利」「個人」という新しい語彙として定着させたという歴史的背景が挙げられる7)。その作業は19～20世紀にかけて東アジア地域の交流の中で行われ，短期間に成果を共有することとなった。もともとそれぞれの語彙の概念が明確に定義されたものである上に，使用されるようになってからの歴史が浅いため，現在も誤差が生じにくいのである。以下に，近代文明の概念を翻訳するために考案された漢字語彙の一部を紹介する。

日本語	韓国語	中国語	ベトナム語 8)	意味(英語で)
社会　しゃかい	사회　(社會) sa hoe	she hui　(社会)	XA HOI	society
個人　こじん	개인　(個人) gae in	ge ren　(个人)	CA NHAN	individual
自然　しぜん	자연　(自然) ja yeon	zi ran　(自然)	TU NHIEN	nature
国家　こっか	국가　(國家) gug gga	guo jia　(国家)	QUOC GIA	nation
恋愛　れんあい	연애　(戀愛) yeon ae	lian ai　(恋爱)	LUYEN AI	love
発展　はってん	발전　(發展) bal jjeon	fa zhan　(发展)	PHAT TRIEN	development

表１　近代文明の概念を翻訳するために考案された各言語共通の漢字語彙の例

これらの語彙の中には，いち早く近代化を推し進めた日本の知識人が幕末から明治にかけて造語したものが多く含まれる。そして，20世紀初頭に日本で学んだ各国の留学生らが近代化を目指す母国に持ち帰って普及させたのだと言われている。造語と普及に関わった当時の知識人（福沢諭吉，梁啓超，金玉均（キムオッキュン），潘佩珠（ファンボイチャウ）ら）はもともと漢籍古典に造詣が深く，旧文明における漢字の含意を咀嚼し再構築するにあたって十分に伝統を踏まえていた。つまり，これらの語彙は同じ教養を持つ知識人たちが共通の目的に沿って検証し，納得した上で共有したものであると言えよう。

そのようにして日本経由で伝播した近代化に不可欠な概念を表す一群の漢字語彙について，「和製漢語」という名称が用いられることが多いが，語彙の出自そのものについては中国語や韓国語の研究者によって異議を唱えられるものも少なくない9)。小論では誰が最初に造語したのかを重視するのではなく，「ある一定の時期に共通の目的を持つ一群の人々によって考案され，共有され，普及するに至った」という点に注目したい。要するに，漢字圏に所属する各地域の知識人がこの時期に旧文明の漢字語彙を解体し再構築する過程を共有した結果，現在も同じ漢字語彙を共有しているという点が重要なのである。

当時の留学生は日本で近代概念を学んで母国でそれを普及させる際に，和語に漢字を当てた「身分」「手続」「見習」「立場」などの訓読語さえも持ち込んでいる。これらは必ずしも近代化に必須の概念とは言えず，むしろ近代以前の和語のニュアンスを感じさせるものもあるが，今ではそれぞれの地域で現地読みの漢字語彙として定着してしまっている。このあたりの歴史的経緯を紹介することは，学習者にとって漢字学習の効率を上げるのみならず，日本で学ぶことの意義を再確認することにつながる。

本論で扱う「漢字語彙」は日本語において音読される語彙を想定しているが，上記のような「日本語起源と推測され，他の言語においても同じ漢字の組み合わせによって同じ意味を持つもの」も，特殊な例として「近代文明に関わる漢字語彙」に含めるべきであると考える。このような例を紹介することは，漢字語彙が特定の地域で考案されて一方的に流入したのではなく，東アジアの広い地域において共有されている現状を理解するのに役立つだろう。

ただし，このことは近代化のために考案された漢字語彙がすべて漢字圏に共有されているということを意味するわけではない。例えば「republic」に対応する漢字語彙は，現在でも「共和国」（中華人民共和国，ベトナム社会主義共和国など）を使用する場合と，「民国」（大韓民国，中華民国など）を使用する場合がある。近代化とともに用いられる

ようになったと考えられる「minister」については，日本語で古語の「大臣（おおおみ）」を当てて音読させているのに対し，中国語では《部长》を，韓国語では《長官》を用いている。ベトナム語の《BO TRUONG》は《部長》に由来すると思われる。国名を漢字で表記する際も，統一された漢字を使用しているわけではなく，アメリカを「米」で表記するか《美》で表記するか，フランスを「仏」で表記するか《法》で表記するかといった差異がある。日本語の郵便切手に該当するのは中国語・韓国語では《郵票》であるが，ベトナム語では《BUU PHIEU（郵票）》が郵便為替を意味しており，切手には漢字語が用いられていないようである。以下，分野別に整理してみる。

分野	日本語	韓国語	中国語	ベトナム語 10)
国名表記	米（アメリカ）	미 （美）	Mei 美	MY
	仏（フランス）	불 （佛）	Fa 法	PHAP
	独（ドイツ）	독 （獨）	De 徳	DUC
	伊（イタリア）	이 （伊）	Yi 意	Y
	英（イギリス）	영 （英）	Ying 英	ANH
郵便関係	切手	우표 （郵票）	you-piao 邮票	TEM THU
	封筒	봉투 （封套）	xin-feng 信封	PHONG BI
	書留	등기 （登記）	gua-hao 挂号	CHUYEN PHAT BAO DAM
	速達	속달 （速達）	kuai-xin 快信	CHUYEN PHAT NHANH
	配達	배달 （配達）	tou-di 投递	CHUYEN PHAT

表２　国名の表記と郵便関連の語彙の例

このように分野別に各言語の共通語がどの程度存在するかを見比べる形で「近代文明に関わる漢字語彙」をカテゴリー別に対比してみせることができれば，漢字文化圏の学習者はそれらを少ない負担で習得できるだけでなく，学習動機を高めることにもなるはずである。

3. 固有の漢字語彙

一方，それぞれの言語における漢字語彙のうち旧文明の系譜を引くものは，それぞれの社会独自の漢字の組み合わせであったり固有の意味を持っていたりする。そのような場合，個々の漢字の意味を足し算して推測しても，正しい解釈に辿り着くことは難しい。つまり，いくら表記に馴染みがあろうとも，外国語の語彙と割り切って扱うべきなのである。

3-1. 日本固有の漢字語彙

日本語で日常的に用いられる「世話」「元気」「地味」「大切」などの漢字語彙は，中国語，

韓国語，ベトナム語には存在しないようである。つまり，漢字表記され音読されるものであっても，日本語固有の語彙として認識するべきである。

ただし，これらの例についても，日本固有の漢字語彙とそれ以外の間に明確な一線を引けるとは限らない。「世間」という言葉は日本固有の言葉として，普遍性の高い近代語「社会」との対比において論じられることが多い。筆者は講読の授業で中国，台湾，韓国の留学生に「世間」に関する評論を読ませて意見を聞いたが，どの学生からも日本固有のものであり翻訳不可能な語彙であると指摘された11)。ところが，那須泉氏の指摘では，ベトナム語にも同形の漢越語が存在し，意味もほぼ同じであるという12)。「場合」は中国語とベトナム語では日本語と同様の意味で使用されるが，韓国語では使用されないようである。留学生同士で議論して，このような例を収集することができれば，日本独自の漢字語彙を特定するのに役立つだけでなく，それぞれの母語との対比において認識を深めることができるだろう。

3-2. 琉球固有の漢字語彙

長く冊封体制に組み込まれていた琉球地方には《ジンブン(存分)》《ダンパチ(断髪)》《ネッパツ(熱発)》などの独自の漢字語彙が存在し，現在に至るまで地域語として使用されている。これらについては，《チョーデー(兄弟)》《スムチ(書物)》《ガンチョー(眼鏡)》などのような日本語との音韻対応で説明できる語彙とは別のカテゴリーを設けて紹介するべきである。琉球語の中に日本語における漢字語彙の受容と異なる背景を持つ漢字語彙が存在することを指摘すれば，沖縄で日本語を学ぶ漢字圏の学生の興味をひきつけ，漢字文明圏の実相を垣間見せることが可能になるだろう。

《ジンブン》は同じ発音の共通語「人文」と表記されることもあるが，『沖縄語辞典』(国立国語研究所資料集)では「存分」という漢字を当てている。《ジンブン》は琉球語で「知恵」を意味するため，いずれにしても同形異義語と認定できる。《ダンパチ》は，日本語の「断髪」が力士の引退の際など特定の文脈で使用されるのと異なり，日常的な「散髪」の意味で使用される。《ネッパツ》は語構成が表通語の「発熱」と逆になっている点に特徴がある。

琉球固有の漢字語彙の例としては，ほかに《海賊(ハイチェー)》《闘鶏(タウチー)》《冬至(トゥンジー)》《風水(フンシー)》《象棋(チュンジー)(将棋)》などが挙げられる。これらの発音は日本語との音韻対応よりも，むしろ中国語(北京官話または福建語などの方言)の語彙が転訛したものと考えたほうが合理的であると思われる。計算を意味する《サンミン》，冗談を意味する《テーフ

ァ》，強盗を意味する《フェーレー(匪類?)》など，漢字語彙に由来する可能性を感じさせる例はほかにも見受けられる13)。

3-3. 韓国固有の漢字語彙

韓国語については，日本語と同じアルタイ系の固有言語に語構成の原理が異なる漢字語彙が大量に流入したという類似点に加え，植民地支配などの歴史的な経緯もあいまって，「日本語と韓国語では共有されるが，中国語では存在しないか意味が異なる」という漢字語彙が少なくない。「案内」「応援」「感心」「説得」「通勤」「到着」「不便」等の日常的に使用される漢字語彙がその例であるが，ハングル表記で使用されているために漢字に由来する語彙であることが意識されにくいようである。

その一方で，同じく漢字に由来する語であっても，そのまま漢字表記したのでは日本語の語彙として通用しないものもある。例えば，「風呂に入る」を意味する《목욕하다(mog-yog hada)》を，韓国語の元の漢字を活用して「沐浴する」と表現した場合，日本語としては通用しづらいだろう。「恐縮する」という意味の《죄송하다(joe-song hada)》は，これが《罪悚》という漢字に由来するという知識を持っていたとしても，日本語学習に生かすことが難しい。同様の例として《酒酊》《始作》などがあり，いずれも하다(する)をつければ「酔っ払う」「始める」という意味の動詞になる。これらは漢字の組み合わせをそのまま日本語に移し換えて「酒酊する」「始作する」のようにしたのでは，日本語の文中で使用することはできないケースである。日本語に同形語があり，意味が日本語と異なるものとしては，《工夫》《議論》などが挙げられる。これらも하다をつければ動詞になるが，韓国語では「工夫する」「議論する」という意味ではなく，「勉強する」「相談する」という意味である。

上記以外の例を，表３でいくつか紹介する。

表記(漢字部分)	韓国語の語義	日本語の同形語
생각하다　(生覚)	思う	存在しない
구경하다　(求景)	見物する	存在しない
인사하다　(人事)	挨拶する	名詞として存在するが意味は異なる
거래하다　(去来)	取引する	動詞として存在するが意味は異なる
할애하다　(割愛)	割り当てる	動詞として存在するが意味は異なる
지적하다　(指摘)	日本語と同じ意味のほかに,「指名して答えさせる」という意味もある	韓国語の《학생을 지적하다（学生を指摘する)》に該当する表現はない

表３　日本語と意味が異なる韓国語の同形語（「하다」を用いる動詞）の例

漢字語彙の《○○하다》は日本語の「○○する」と近似しているため，母語の干渉が起こりやすく，特に注意が必要とされる。

韓国語にはそのほかにも《便紙》《寒気》《逍風》《内外》《宮合》《所聞》など漢字に由来する語彙が数多く存在するが，これらを日本語訳するとそれぞれ「手紙」「風邪」「遠足」「夫婦」「相性」「噂」という意味になる。

3-4. ベトナム固有の漢字語彙

ベトナム語にも，《節倹》という漢字に由来する《TIET KIEM》が日本語の「貯金」に該当するなど，固有の漢字語彙が存在している。同様の例として，《仔細》《罪業》《表情》《体操》《体育》《歴事》などの漢字語彙が，日本語の「親切な/注意深い」「可哀想な」「デモ行進」「スポーツ全般」「体操」「礼儀正しい」という意味で用いられているという14)。

ベトナム語における漢字語彙の特徴として，後置修飾が挙げられる。《所長》《車電》などの語彙はベトナム語の修飾関係に則った語彙構成となっており，日本語の「長所」「電車」に該当する語彙である。中国語にも日本語との語順が逆になるケースがないわけではないが，それは《限制(日本語の「制限する」)》や《偵探(同「探偵」)》のように同義の漢字を重ねた語彙の場合であり，ベトナム語のように〈修飾-非修飾〉の前後関係が逆転するケースは見当たらないようである。

3-5. 中国固有の漢字語彙

中国語話者にとっては，前節で指摘した「文明語としての漢字語彙」以外の語彙がすべて「固有の漢字語彙」に該当するわけであるが，ここでは日本語の漢字語彙と同形であって意味が大きく異なる例に限り，いくつか紹介するにとどめる。

《便宜》は「値段が安い」という意味であり，日本語の「便宜を図る」のような使い方はない。《結構》は「構造」「構成」という意味の名詞であり，「良い」という意味はない。《依頼》は「～を頼りにする」という意味であり，仕事を頼むという意味ではない。《無理》は「道義性がない」という意味であり，「できない」という意味では使用されない。《注文》は「文に注釈をつける」という意味であり，「オーダーする」という意味はない。《回復》は「行って帰ってくる」という意味であり，病気が治ったときには《恢復》のほうを用いる。

上記の例からわかるように，中国語で形容詞として使用されるものが日本語では名

詞であるなど，品詞が一致しないことが多く，同義語や類義語であっても品詞が異なることが珍しくない。このことについては，6. で改めて議論する。

3-6. 各言語の固有の漢字語彙のまとめ

上に挙げたように「同形の漢字の組み合わせであっても意味を正しく推測できない漢字語彙」を「同形異義語」と呼ぶことにする。これらのカテゴリーに分類される語彙は，字形に囚われずに外国語として認識する必要がある。語彙の構成要素である漢字が記憶のヒントになる一方で，正しいニュアンスを把握するためには適切な文脈の中で理解させる必要があり，指導にあたっては例文とともに記憶させるように努めなければならないのである。

4. 同形類義語

石原(1990)でも指摘したが，日本語学習者が特に留意すべきなのは上に挙げたような明瞭な意味的差異を持つ漢字語彙ではない。上記の「同形異義語」については，リスト化して記憶することで誤用を回避することが容易であるが，「同じ漢字の組み合わせからなる語彙であり，意味も近似しているが意味範囲にズレが見られるもの」については，母語の干渉による誤用を回避することが難しい。

このような例を「同形類義語」と呼ぶことにする。文法上の機能の違いについては後にのべることにして，ここでは意味上の隔たりに限定して議論する。実際によく目にする誤用例は，日本語の意味範囲よりも中国語の意味範囲のほうが広いケースであり，《认识(認識)》《简单(簡単)》などの例が挙げられる。

《认识》は，日本語の意味と共有される部分もあるが，中国語では「顔見知りである」という意味合いでも使用されることがあるため，「私はあの店の主人を認識しました」のような誤用が生じやすい。《简单》も基本的な意味は日本語と同じだが，中国語では否定的なニュアンスで「平凡な」という意味でも使用されるため，しばしば否定形の《不简单》が肯定的な評価を含んで「素晴らしい」という意味で使われる。そのため，中国人学生が「簡単じゃない」と表現したとき，そのニュアンスが日本人に正しく伝わっていない可能性がある。

このような例は枚挙にいとまなく，詳細についてはリストを作成して一つずつ検証するしかないのであるが，固有語の語彙と漢字語彙の棲み分けに関わる問題として，大まかな傾向を指摘することは可能である。

一例を挙げると，漢字語彙によるナ形容詞については，中国語と比べて日本語では意味範囲が狭く，抽象概念に適用される傾向が強いため，使用される局面が限られることが指摘されている。例えば，日本語の「潔白な」は具体的な色合いではなく「清廉潔白」の意味で用いられるため，「*潔白な壁」「*潔白な歯」などという表現は不自然になるが，中国語では「壁」や「歯」のような具体的な物を修飾する際にも《洁白(潔白)》を用いる。同様に「柔軟な」や「広大な」も，日本語では「*柔軟な枝」「*柔軟な毛皮」「*広大な人口」「*広大な読者」などとはふつう言わないが，中国語ではこのような修飾関係に違和感が生じないという15)。このような例を挙げて，日本語では固有語(「しろい」「やわらかい」「ひろい」)と漢字語彙（「潔白な」「柔軟な」「広大な」）との間で「具体的な物についての形容」と「抽象的なものについての形容」との使い分けがなされていることを認識させれば，誤用を未然に防ぐのに効果が上がるものと思われる。

この指摘は，漢字語彙に限らず，いわゆる外来語の形容詞にも当てはまる。英語起源の語彙であっても，「*ソフトな椅子」「*ホットなコーヒー」のように具体的な物を形容する際には用いられず，「ソフトな口調」「ホットな話題」のような抽象的なものの形容に限って使用されるという事実を併せて指摘するのが効果的だろう。

また，スル動詞についても同様の傾向が見て取れる。「代表する」「破壊する」などは，日本語ではそれぞれ「ある集団に所属する一人が全体を代表する」「形や機能を壊して使用不可能にする」という意味を持つが，中国語の同形語は日本語よりも意味の範囲が広く，「代理する」「(形のないものを)傷つける」という意味でも用いられるため，「*理事長を代表して挨拶する」「*名誉を破壊する」のような誤用を招きやすい。

このような誤用を回避するためには，漢字圏の学生を集めたクラスで学習者に例文を作成させ，一つ一つの漢字語彙について相互に検証しあいながら共同でカテゴリー分類する作業が有効であろう。

上に挙げた例は，いずれも日本語の漢字語彙のほうが意味範囲が狭いために，日本語の文章を作る際に母語の干渉による間違いを犯しやすいものであるが，その一方で，日本語の意味範囲のほうが広いというケースも散見される。

「注意」は，日本語では①車に注意して道を渡る，②居眠りしている学生を注意する，などの用法があるが，中国語では②のような「警告・指導」の意味はない。この例については，韓国語でもベトナム語でも，中国語と同じ用法しか存在しないようである。

このような，日本語の漢字語彙のほうが意味範囲が広いケースについても，学生に注意を促す必要がある。

5. 意味範囲のズレに基づく誤用の具体例

本節では，実際に漢字圏の留学生が書いた作文から，母語と日本語の意味範囲のズレによって誤用が生じた例を紹介する。これらの例文はすべて筆者が担当した中級レベルの講読クラスの課題の記述内容から引用した。

(1) *アメリカは，まだ基地でオキナワを控制するようになっている。
(2) *獣だから自分の感情を表達できません。かわいそう。
(3) *同僚の間の関係が平滑できればいいと思う。
(4) *自分の自尊心を維持するために，高傲な態度で彼氏との愛を汚させた。

(1)～(4)の例は，いずれも中国人留学生の記述であり，日本語としては一般的に使用されない漢字語彙を，母語からの推測で使用してしまったケースと思われる。どれも意図したい内容は推測可能であるが，日本語としては正しくない。「アメリカは，まだ基地でオキナワを制御するようになっている」「獣だから自分の感情を表現できません」「同僚の間の関係が円滑に処理できればいいと思う」「自分の自尊心を維持するために，高慢な態度で彼氏との愛を汚した」のように，日本語の語彙に置き換えて修正しなければならない。

韓国人留学生の記述からも，同様の誤用例が見つけられる。

(5) *あるところは同質感を感じました。
(6) *社長らしく失手がないように最後まで考えてみて決する人だった。
(7) *自分の哀情を表さない人だと思います。
(8) *ライバルに対してしっととか欲心など持っている人。

これらは，韓国語で使用される漢字語彙《동질감(同質感)》《실수(失手)》《애정(哀情)》《욕심(欲心)》をそのまま日本語に転用したために生じた誤用であろう。意図したい内容は推測可能であるが，日本語としては不自然であり，例えば「共感」「へま」「弱み」「敵対心」のような語彙に置き換えるべきであると思われる。

次に，「同形類義語」の漢字語彙を選択したと思われる例を挙げる。(9)～(11)はいずれも中国人留学生の記述である。

(9)　*今井さんは武田さんの指示を逆行する。

(10) ?真剣に好きになった彼女のことばかり，何でも彼女のため考える，単純な恋。

(11) ?家畜化の後，野生動物は自分自身を失い，命を守る本領もなくなってしまった。

これらは，表現意図は斟酌できるものの日本語としては不自然さが残ってしまう例である。「今井さんは武田さんの指示に逆らう」「真剣に好きになった彼女のことばかり，何でも彼女のため考える，純粋な恋」「家畜化の後，野生動物は自分自身を失い，命を守る能力もなくなってしまった」のように書き直すことで自然な表現に修正できるのであるが，このようなケースについてはその場限りの指摘にとどまってしまいがちである。

「逆行する」は，日本語では「一方通行を逆行する」のような具体的な例のほかに「時代に逆行する」のような抽象的な用法もあるが，「指示に逆行する」という言い方は一般的ではない。これは，固有語の「逆らう」との棲み分けによって漢字語彙の使用範囲が制限されているケースの一つとして説明することが可能である。

「単純な恋」が日本語として不自然なのは，日本語ではやや否定的なニュアンスのある「単純」と肯定的な評価の色付けがある「純粋」の棲み分けが行われているからであろう。このような，評価のニュアンスを異にする例は他にも多数あり，たとえば「深刻」「重大」は日本語では好ましくない内容を語る際に用いられるが，中国語の《深刻的理解》《重大的勝利》などは肯定的な評価が与えられるという16)。

「本領」は，日本語では「本領を発揮する」のような限定された用法でしか用いられないが，中国語では「彼には本領がある」のような表現が一般的に使用されるようである。

以上見たように，意味のズレといっても一様ではなくケースごとに検証する必要があり，学習者が自ら検証した結果を蓄積することで，どのようなパターンの誤用を犯したのかを把握して内省し，自己検証する訓練が求められるのである。

6. 文法上の問題点

先にも述べたように，漢字語彙は長期にわたって東アジアで共有されていたため，漢字語彙特有の語構成（中国語の語構成と同じ）が各国語において共有されている17)。他動詞と目的語の関係を例に挙げると，通常の日本語の語順と異なり「防水」「節電」の

ように前項が他動詞で後項が目的語になっている。このパターンの造語力は「防カビ」「省エネ」のような新しい語彙を考案する際にも適用されている。

注意しなければならないのは，中国語ではこの語構成が固定されているとは限らないことである。たとえば，「結婚した」という意味を表す文は，アスペクトマーカーを動詞の後ろにつけると《結了婚》《結過婚》のようになる。つまり，《結婚》という語彙が熟語として固定しているわけではなく，〈動詞-目的語〉の関係を保っているのである。

この例からも推測できるように，漢字語彙が文中でどのような品詞として扱われるのか，慎重に判断する必要がある。

例えば，「緊張」「軽蔑」の場合，日本語ではどちらも動詞として使用されるが，中国語では形容詞，副詞として使用されることが多いため，次のような誤用を招きやすい。

(12) *私は緊張だった。
(13) *軽蔑に笑った。

これらの例は，それぞれ「私は緊張した」「軽蔑して笑った」のように，日本語の品詞が動詞であることを認識して文を作らなければならないのである。

逆に，「豊富」「明確」の場合は，中国語では動詞で日本語では形容詞となる。そのため，

(14) *知識を豊富する。
(15) *目的を明確する。

のような誤用を犯しやすい。「豊富」「明確」が日本語でナ形容詞であることを認識していれば，「知識を豊富にする」「目的を明確にする」という正しい文が導き出されるはずである[18]。また，

(16) *カメレオンは皮膚の色を変化して身を守る。
(16)’カメレオンは皮膚の色を変化させて身を守る。
(17) *その国の政権は反対派によって分裂された。
(17)’その国の政権は反対派によって分裂させられた。

のような，自動詞・他動詞・使役・受身に関わる誤用も広く見られる。安易に母語の知識に基づいて例文を作るのではなく，「○○する」という形式が自動詞であるか他動詞であるかという点を正しく認識する必要がある。

(～が)	*開催される*	*計画される*	*発揮される*	*展示される*	*左右される*	*締結される*	*促進される*
他動詞	開催する	計画する	発揮する	展示する	左右する	締結する	促進する
自動詞	孤立する	分裂する	普及する	発展する	変化する	収束する	発足する
(～を)	*孤立させる*	*分裂させる*	*普及させる*	*発展させる*	*変化させる*	*収束させる*	*発足させる*

表４　自動詞と他動詞の対応例

このほか、

(18) *その業者は法令を違反した。←正しくは、「その業者は法令に違反した。」
(19) *彼女の意見を反対した。　　←正しくは、「彼女の意見に反対した。」

のような，目的語を「を」でマークするか「に」でマークするかという点で間違えてしまうケースも，「応募する」「対応する」「同意する」などの動詞を用いた際にしばしば観察される。

上述の問題群は，ヴォイスに関わる問題として一括して整理する必要があるだろう。例えば，「○○する」という漢語動詞を①典型的な自動詞，②他動詞と間違えやすい自動詞，③自動詞と間違えやすい他動詞，④目的語を「を」でマークしない他動詞，⑤典型的な他動詞，のように分類して提示するだけで，多くの誤用を未然に防げるはずである。

7. 文法的な誤用の具体例

ここでは，母語の干渉が文法的な誤用を導いたと思われる実例を挙げ，分析する。これらの例文は(1)～(11)と同じく筆者が担当した中級レベルの講読クラスの課題の記述内容から引用したものであり，(25)は韓国人留学生，それ以外は中国人学生による記述である。

(20) *(水野季実子は)高慢な都市女性と思う。
(21) *この獣は善良を象徴だと思います。

(22) *透明人間と呼ばれていて，孤立でした。

(23) *まず，ペリー提督に賄賂したりわざと弱みを見せたりして警戒心を下げさせる。

(24) *自分を犠牲することによって，テロの一撃を加えることがある。

(25) *オキナワは歴史的で日本の本土からぎせいしてきた。

(26) *彼は連中から孤立された。

(27) *孤立されて，不吉な存在と思われて，透明人間と呼ばれる。

(20)は「都会的な女性」というべきところを，名詞が名詞を修飾する中国語の構造をそのまま適用してしまったケースと思われる。(21)(22)は品詞の誤認であり，「象徴する」「孤立する」のように動詞として使用しなければならない。(23)～(25)は日本語では名詞としての用法しか持たない語を間違って動詞と認識してしまった例であり，「賄賂を渡す」「犠牲にする」という表現に改めなければならない。(26)(27)はヴォイスの問題である。

これらは誤用されやすい語彙と誤用パターンの典型的な例だと言えるだろう。

8. まとめ

小論の考察によって，以下のことが明らかになった。

①近代文明に関わる漢字語彙をカテゴリー毎に提示することで，漢字圏の学生への効果的な指導を行うことができる

②同形語の中には，語義のズレに一定の傾向が見られるものがある

③同形語で意味の差が小さい場合でも，品詞が異なることが珍しくない

④母語の干渉による文法上の間違いには，ヴォイスに関わる例が多く見られる

特に，中国語話者と韓国語話者との間に共通する一定の傾向が見られることは，教育現場での具体的な指導場面を考える上で注目に値するだろう。

韓国語話者とベトナム語話者は，どちらも母語において漢字表記が一般的でないため，漢字の字形および漢字語彙の認識に個人差が大きく，中国語話者と同じクラスで学習することが適当であるとは限らない。しかし，漢字圏の学生という自覚を持って学ぶことによって母語の知識を活かし，同時に母語の干渉による誤用を未然に防げるように訓練することが可能になる。また，中国の学生にとっても，音韻対応における入声音及び韻尾「-m」の残存など，広東語・福建語などの中国語南方方言との関連につ

いて知る機会があれば，日本語における呉音・漢音・唐音と慣例読みの混在という複雑な状況について，漢字圏形成の歴史的経緯の一端を表す現象として興味を持って学べるようになるだろう。

結論として，「漢字圏からの留学生のための漢字クラス」を開講することには十分な意義があると考えられる。

註

(1) 「漢字圏」の具体的な範囲について明快な定義が共有されているとは言いがたい。特に，韓国及びベトナムについては，漢字そのものを習得する機会が限定的であることから「漢字圏」とは別に扱うべきだという考えもある。小論では漢字語彙を習得する際に母語の既習語彙に関する知識が役に立つという観点から，韓国語もベトナム語もともに漢字圏の言語として扱うことにする。

(2) 財前(2010)を参照のこと。

(3) Phan(2003)を参照のこと。

(4) 小論では日本の標準語として使用されない外国語や琉球語などの語彙を《　》で示す。

(5) 教材ではないが，中国語・韓国語のほかにベトナム語も含めた漢字語の共通語彙に注目したものとして，藤井(1986)が挙げられる。

(6) 加納千恵子ほか(2011)は「今までは非漢字圏を対象にしたものが多く，数の上では圧倒的多数を占めている漢字圏学習者のための教材はあまり開発されてこなかった」と指摘している。(p. 13)

(7) 柳父(1982)を参照のこと。

(8) 日本語と同形の漢字が語源であることが発音から推測できるが，現在のベトナムでは漢字で表記されない。そのため，この表には漢字表記を載せなかった。

(9)『日本語学』2011年7月号では何華珍，陳力衛，吉本一らがその漢字の組み合わせが最初に記載された資料を渉猟して出自を明らかにしようと試みており，福沢をはじめとする当時の日本の知識人たちがそこから引用した可能性を指摘している。

(10)ベトナム語では国名を漢字で表記する習慣がないが，発音から推測すると中国語と同じ《美》《法》《徳》《意》《英》に由来すると思われる。郵便関連では，《PHONG BI》が《封皮》に，《CHUYEN PHAT》が《轉發》に，それぞれ由来するであろうと推測される。

(11)佐藤(2008)，pp. 10-27を読解のテキストとして授業で使用した。

(12)私信による。

(13)石崎(2005)は，過去に漢語由来と指摘された語彙について音声の対応関係が認定できるかどうか，中国語の文献に用例が見当たるかどうかなどの指標に基づいて調査し，由来未詳の語を安易に漢語由来と認定する傾向が見られることを指摘した上で，中国語から直接琉球方言に移入された漢字語彙は限定的であると述べている。

(14)富田(2000)を参照のこと。

(15)大河内(1986)を参照のこと。

(16)石・王(1983)を参照のこと。

(17)ベトナム語の後置修飾や琉球地域語の《熱発》のような例外もある。韓国語にも《約婚》(「婚約」のこと)のような例が存在する。

(18)韓国語話者も，母語からの類推により，漢字語彙と《하다》からなる語彙を「○○する」と「○○な」のどちらに翻訳するかという点で迷うことがあるようである。

参考文献

石崎博志(2005)「琉球方言における漢字語彙―直接借用を中心に―」『沖縄文化』第40巻1号　沖縄県立芸術大学附属研究所

石原嘉人(1990)「ナ形容詞とスル動詞―中国・韓国の学生を対象として―」『日本語・日本文化』第16号　大阪外国語大学留学生別科・日本語学科

大河内康憲(1986)『日本語と中国語の同形語』日本語と中国語対照研究会

加納千恵子ほか(2011)『漢字教材を作る』スリーエーネットワーク

金光林(2005)「近現代の中国語、韓国・朝鮮語における日本語の影響―日本の漢字語の移入を中心に―」『新潟産業大学人文学部紀要』第17号　新潟産業大学

財前謙(2010)『字体のはなし』明治書院

佐藤直樹(2008)『暴走する「世間」』バジリコ社

柴公也(1986)「漢語動詞の態をいかに教えるか―韓国人学生に対して―」『日本語教育』59号　日本語教育学会

杉村泰ほか(2009)「中国語母語話者による日本語他動詞の自他の習得」『2009年度日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会

石堅・王建康(1983)「日中同形語における文法的ズレ」『日本語と中国語の対照研究別冊』日中対照研究会

富田健次(2000)『ヴェトナム語の世界』大学書林

藤井友子(1986)『漢字音日中朝ベトナム共通語彙408』朝日出版社

松田真希子ほか(2008)「ベトナム語話者にとって漢越語知識は日本語学習にどの程度有利に働くか—日越漢字語の一致度に基づく分析—」『世界の日本語教育』18号　国際交流基金

柳父章(1982)『翻訳語成立事情』岩波新書

吉田雅子(2011)「漢語サ変動詞の日中対比」『専修大学外国語教育論集』第39号　専修大学

若生正和(2008)「日本語と韓国語の漢字表記語の対照研究—漢語動名詞を中心に—」『大阪教育大学紀要』第Ⅰ部門第56巻第2号　大阪教育大学

Phan Thi My Loan(2003)『ベトナム人への漢字指導—漢越音の効果的利用法』大阪外国語大学言語社会研究科地域言語社会専攻　修士論文

（琉球大学留学生センター）

Native speakers of Chinese, Korean and Vietnamese and the acquisition of Japanese KANJI Compounds

ISHIHARA,Yoshihito

Keywords: Sinosphere, KANJI compounds, vocabulary acquisition, interference

Abstract

The aim of this paper is to argue the effectiveness of acquisition of Japanese KANJI compounds by native speakers of Chinese, Korean and Vietnamese. It is obvious that those students have an advantage in learning KANJI compounds. However, their native language can still interfere with their capacity to learn those KANJI compounds.

This paper suggests a framework of a KANJI class for such students. It insists that Japanese KANJI compounds should be divided into modern words and traditional words in order to make students conscious of the relations and history of East Asia. After that, students will know how to use their knowledge of KANJI compounds in their native language.

It is very easy to find some typical errors of KANJI compounds in their compositions. This paper analyzes those errors from two points of view. The most typical error comes from the differences between the meanings of the KANJI compounds in Japanese and their native language. The other common source of mistakes comes from grammatical differences between the two languages, such as causative, passive and transitive forms.

(University of the Ryukyus)